

くらしの中で読む『正法眼蔵』

面授の巻——その四

成興寺住職

小倉玄照

仏祖の面目眼睛、かくのごとし。この仏祖に
まみゆるは、釈迦牟尼仏等の七仏にまみえたと
まつるなり。仏祖したしく自己を面授する正当
愆^{いん}時^じなり。面授仏に面授するなり。葛藤^{かつとう}をも
て葛藤に面授して、さらに断絶せず。眼^{がん}を開^{ひら}し
て眼に眼授^{がんじゆ}し、眼受す。面をあらはして面に面
授し、面受す。面授は面処^{めんじよ}の受授^{じゆじゆ}なり。心を拈
じて心に心授し、心受す。身を現じて身を身授
するなり。他方他国もこれを本祖とせり。震旦^{しんたん}
国^{こく}以東、ただこの仏祖正伝の屋裏^{おくり}のみ、面授面

受あり、あらたに如来をみたてまつる正眼をあ
ひつたへきたれり。
釈迦牟尼仏面を礼拝するとき、五十一世なら
びに七仏祖宗、ならべるにあらず、つらなるに
あらざれども、俱^く時^じの面授あり。一世も師をみ
ざれば弟子にあらず。弟子をみざれば師にあ
らず。さだまりてあひみあひみえて面授きたれ
り、嗣法^{しほふ}しきたれるは、祖宗の面授^{めんじゆ}処^{じよ}道現^{どうげん}成^{じやう}
なり。このゆえに、如来の面光^{めんくわう}を直拈^{じきねん}しきたれる
なり。

現代語私訳

仏祖のかおかたちやゆんたまのありようはこのようなものである。今に生きる仏祖にまみえることは、釈迦牟尼仏などのいわゆる過去七仏にまみえたてまつることになる。そのときまさに、仏祖がしたしく自己自身を面授するのである。それは、面授をいのちとする仏が、面授をいのちとする仏に面授するのである。煩惱をまらんと含んだ仏のいのちを煩惱まらがかえて苦悶する相手に面授し、仏のいのちの傳承を断ちきらないようにする。眼を開いて眼から眼に授け、眼で受けとめる。面の表情を豊かにして面に面授し、面でそれを受ける。面授は、面そのものによって受けたり授けたりするのである。しかも、心をそこに込めてそれを心に授け、心で受けることであり、身を端的にそこに示してそれを身で授けることでもある。地上以外の他

の仏国土や、或いは他の国に於ても同じであつて、このような面授の祖師を本祖とするのである。中国以東については、仏から正しく法を伝えられた我が門のみに面授面受のことがあり、いきいきと如来を見たてまつる正しい眼を伝えて来たのである。

釈迦牟尼仏の面を礼拝するときは、如浄禪師に至る五十一代の仏祖や、或いは釈迦牟尼仏以前の七代の仏が、眼前に並んでいるわけではないし、その背後に連なっているわけではないが、同時にすべての仏祖と面授があるのである。一代であっても師をみなかつたならば弟子ではないし、弟子をみなかつたならば師とは言えない。例外なしに師と弟子が互いに見、かつ見られて、面授して来たのであり、そのようにして法を嗣いで来たというのも、仏祖のいのちが面授のところにはたちまちに輝くからである。それゆえに、師と弟子が面授するとき、如来の面の光をじき

じきに捉え、それを伝えて来たのである。

面授仏が面授仏に面授

凡夫が悟りを開いて仏になる——私たちはついそういうふうと考えてしまうのですが、道元禪師の説かれる正伝の仏法に於きましては、それは間違いです。「一切衆生悉有仏性」つまり、この地上に存在する一切のものは、そのまま仏性なのですから、凡夫は凡夫のままに仏なのです。修行の成果として仏になるとか、或いは面授して仏になるとか、そういうふうには考えは解釈を誤ることになります。

「面授仏の面授仏に面授するなり」という一節は、その点で注目しなければなりません。これを例えば「面授によって仏となったものが、面授によって仏となるべきものに面授する」というような解釈をしたら、何だか違和感を覚えるはずです。「面授仏」は、「一切衆生」の本質

と考えるければならないのです。この地上に生存しているもの、つまり一切の生物は、「面授仏」にほかならないのです。

それは、ローレンツがハイイロガンを観察することによって発見した刻印づけ（刷り込み）の現象を思い起こしてご覧になれば納得がいくはずです。ニワトリとか、アヒルとか、或いはカモなどの離巢性のヒナは、孵化直後の短い時間内に見た刺激の対象のあとを追い、それを親とみなして成熟した後まで接触を保つというのです。大自然の中で孵化したハイイロガンなどは、その直後十数時間以内にはいる刺激は、例外なく親鳥のほずですから、ことはうまくはこんで行きます。けれども、人工孵化のヒヨコなどの場合には大変です。世話をする人間に面授してしまつて、ついには成熟後の配偶者の選択にまでそのことが影響して来るといふ笑えぬ喜劇が生じるのです。

離巢性のヒナの場合に顕著な現象としてローレンツは刻印づけの現象づけの現象を報告したわけですが、人間の場合にもそれに似た本性があるのではないかと予想したらどうでしょう。それを科学的に証明した人があるのかどうか。

その点になると私もよく承知していませんが、「面授仏の面授仏に面授する」という道元禅師の表現は乳幼児のときから始まって成長したのちも、人間は、面かほをみつめあうことによつて心を伝えあう本性を保ち続けているという前提があつてこそ生きてくるのです。少なくとも私たちはそのことに確信をもっていなければ、面授の真髄は臍はそおち出来ないと申してもよいでしょう。

葛藤が葛藤に面授

さて、面授したのちに仏になるのではなくて、私たちは凡夫のままに「面授仏」であるとした

ならば、「面授仏」が「面授仏」に面授するその「面授」のありようも私たちの常識的な感覚といささか異なつて参ります。つまり、凡を否定した聖なるものとしての仏を面授するのではなくて、凡も聖もまるごと包含した仏のいのちを面授するのでなくては、面授仏の面授ではないのです。

そういう意味で「葛藤かつとうをもて葛藤に面授して、さらに断絶せず」という一節は、きわめて重要です。読みとりに注意も必要でしょう。

「葛藤」は、つたとかずらのことですが、葛も藤もともにつる性の木で、からみつきもつれついで解けないことから、それを比喩的に使います。『正法眼蔵』には、「葛藤」という一巻がありますが、その中に

「おほよそ諸聖ともに、葛藤の根源を截断せうだんする参学に趣向すといへども、葛藤をもて葛藤をきるを截断といふと参学せず、葛藤をもて葛藤

をまつふとしらず、いかにいはんや葛藤をもて葛藤に嗣続することをしらんや。」

（おおむね諸々の聖者たちは、煩惱の根っこを断ち切るのを学ぶことに立ち向かうのだけれど、煩惱をもつて煩惱を切るのを本当のたちきることだということを知らないし、煩惱が煩惱にまつわりつくということもしらない。まして煩惱をもつて煩惱に受け嗣いでいくことが仏のいのちを嗣ぐことだということをどうして知ろうか。）

拙訳は、葛藤を煩惱のしがらみの比喻と解しての上のものです。あながちに不自然な訳でもないと思っています。このような「葛藤」に対する道元禅師の考え方を年頭におきますと「葛藤をもて葛藤に面授して、さらに断絶せず」という一節は、煩惱のしがらみの中に生きる私どもの生き方をそのまま肯定した上で面授があるのだということが納得できましよう。



最近、保育園を中心にして、若い保母さんや両親とつきあっていて気になることがいろいろあります。その一つが最近の若い人の不気味なほどの真面目さです。そのこと自体は決して悪いことではないのですが、若い人の他の人との関わりあいの淡泊さがその真面目さと決して無縁ではないと気づいてみると、ちよつと不気味になって来ます。

先だって、お供えの菓子折を一つ職員室で一緒に食べたのですが、お菓子が三つ余りました。そこで余った分は、ジャンケンをして勝った人が貰ったらどうですか、と家内が言いました。ところが、若い人はそういうことには気が乗らないらしく、結局、年輩の人に譲ってしまいました。同僚が向かいあってジャンケンをすれば、心の交流も持てて楽しいだろうという管理職の発想は空振りに終ってしまったのです。

きつと誰もが、幼い時から親の指示や先生の

言われることを素直にきくいい子で育って来たのでしよう。きょうだい喧嘩はもちろんのこと、友だちとも喧嘩ひとつしないで成長したのかもしれない。その分、人との関わりも淡泊ですから、ジャンケンまでしてたつたひとつの菓子を手に入れたくもないのでしよう。

私は、常日頃から歯に衣着きぬせずにものを言う傾向があつて、よく人の感情を害することがあります。そのことを気にはかけていても習い性というのには不思議なもので、ふとした拍子ひょうしにその悪癖が出てしまうのです。そんなとき、いったん感情を害してしまつたらどうにもそれが修復の不可能な人がこのごろ増えて来たような気がします。怒らしてしまつたらもうおしまひになつてしまうのです。これが、ジャンケンをしたがらない傾向と軌を一にしているのではないかと、私は思うのです。

喧嘩をしたり、仲直りをしたり、そういうこ

との繰り返しの中に人間関係は深まって行くのだと私は思います。そうだとすれば、最近の若い人たちは、幼いときから喧嘩を抑制よくせいされて育ったのかもしれない。

もちろん、私のように何でもツケツケとものを言ったりするのも、幼児期に存分に喧嘩をしたり、仲直りをしたり、ということ繰り返して育っていなかったせいかもしれません。しかし、今更それを反省してみてもとりかえしはつきません。これから育って行く乳幼児たちに喧嘩をしたり、仲直りをしたりという生活を最大限に保証してやりたいと私が念じるのは、私自身の乳幼児期に対する悔恨が原点にあるせいかもしれません。

「葛藤をもて葛藤に面授」ということは、つまり、私たちの喧嘩をしたり、仲直りをしたりというまことに泥臭い人間どうしの葛藤をダイナミックに肯定した、いきいきとしたいのちを

相続して行かなければならないということなのです。そうでなければ、せっかく相続したはずのいのちがいつのまにか衰弱してしまい、断絶の危機に直面しかねません。

ところでもう一つ肝甚な点があります。それは、面かおと面と、或いは眼と眼を向き合わせた葛藤でないとならずに不可能だということです。電話や手紙で喧嘩を始めると、仲直りは不可能となってしまうかねません。とかく便利な文明の利器は、仏のいのちを伝えるためにマイナスにはなってもプラスにはならないようです。

著者紹介 小倉玄照（おぐら げんしよう）

一九三七年 岡山県に生まれる。一九六〇年
駒澤大学仏教学部禅学科卒業。一九七三年
曹洞宗大本山永平寺講師。

現在 岡山県苫田郡加茂町 成興寺住職